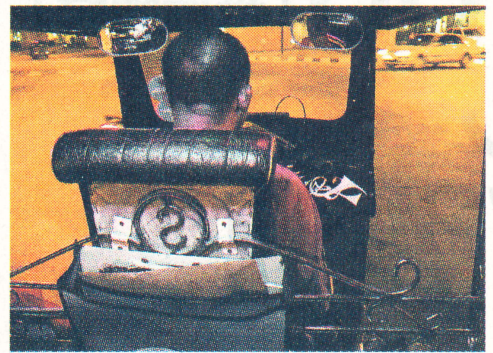


360°

フォトジャーナリスト

宇田有三



乗降扉のない「トゥクトゥク」に乗って、夜のチェンマイを走る

タイ北部のチェンマイ市 大きい四輪のタクシーよ  
で先週「トゥクトゥク」とり小型の「トゥクトゥク」  
呼ばれる小型三輪タクシーの方が当然安い結果になっ  
に乗った。「トゥクトゥク」  
を利用するのは数年ぶり。  
「空港までいくら?」

## 値段交渉

ホテル前で客待ちしていた。当初、この「トゥクトゥク」を結構利用していた。まず、その安さに驚かされた。五、十バツ(約百四十円)「

十二年前。首都バンコクで、目的の地までの料金は運転手との交渉次第。車体の

た。当初、この「トゥクトゥク」走り始めるようになると、  
「五、十バツ(約百四十円)」を結構利用していた。まず、その安さに驚かされ  
「五、十バツ(約百四十円)」を結構利用していた。まず、その安さに驚かされ  
「五、十バツ(約百四十円)」を結構利用していた。まず、その安さに驚かされ

な移動手段となつている。バスターミナルに着くと、運転手との駆け引きが始まる。重たい荷物は安全な場所に隠す。荷物を持つて値段交渉をすると足元を  
「五、十バツ(約百四十円)」を結構利用していた。まず、その安さに驚かされ  
「五、十バツ(約百四十円)」を結構利用していた。まず、その安さに驚かされ

るのか。おそらく、だまされたくないという自己防衛。あるいは生き抜くための自分の能力を試そうとする倒錯した感覚だろうか。  
日本は今、他の国に比べて、生活は確かに豊かになった。インターネットが普及し、個人が手にする情報量は格段に増えた。だが、スーパーやコンビニに行つて、物を買う時、値段交渉をすることなく一方的な値段を決められている。  
「どうしてこれがこの値段なの?」と考えない生活を続けていると、物を一つ買つのにいちいち料金を交渉するのがしんどくなってくる。お金を払う時、自分の目で見て納得して払う。それは生活の基本。なのに、それが日々の生活の中から忘れ去られていつている。便利なシステムなのだが、時に釈然としない。